

《研究ノート》

生業戦略におけるヤク—ウシ雑種
—ネパール、クンプ地方の家畜種構成とその変化—

月原敏博*

1 はじめに

チベット—ヒマラヤ地域の牛類家畜にはウシと同じ牛属 (*Bos*) の異種としてヤク (Yak) があるが、これとウシの間では種間雑種がえられるうえその雑種にも妊性があって、異種間でも遺伝子のフロー (gene flow) が存在している。

ネパール、クンプ地方のシェルパ族は、積極的に雑種交配をもくろみ、また盛んに家畜交易を行っている点で、このヤク—ウシ相互の近縁性を逆によく応用している住民の一つである。

シェルパ族の牧畜一般やチベット文化地域のヤク—ウシ雑種についてはすでにいくつもの報告があるが [VON FÜRER-HAIMENDORF 1975, 鹿野 1978, 小林 1987, BROWER 1991, NISHIDA *et al.* 1988, 1989, STEVENS 1989, DOWNS 1964, DOWNS and EKVALL 1965, JHOSHI 1982, PHILLIPS *et al.* 1946], 本稿では、世帯ごとに多様な家畜種構成が、その主体の選ぶ生業戦略と密接に関連してきた様相を記述的に報告し、ヤク—ウシ雑種が生業経済の維持・変化のなかで果たした意義を考察したい。

なお現地調査は、1989年より1992年まで毎夏1～5週間ほど行った(時期は5月から9月)。主な調査村は、クンプ地方ではナムチェ、クムジュン、クン

*つきはら としひろ、京都大学大学院文学研究科

デであり、クンプとの家畜交易の盛んな南のソル地方にも2度訪れた。また本報告の内容は、月原・古川〔1991〕の論旨を部分的に発展させたものである。

2 主な牛類家畜種の特徴・用途

近年観光サービス業への傾斜が非常に大きくなったとはいえ、シェルパ族は他のチベット文化地域の住民と同じく、伝統的に農耕・牧畜・交易を兼業してきた。

彼らにとっての主な家畜種は、ヤクとウシ、そして両者の一代雑種であるゾ（Zo, Dzo）の3つである。種間雑種はさておき、彼らの居住地を取り囲む範囲の代表的な地方品種としては、まずチベット一般のヤク（♂は Yak, ♀は Nak と呼ばれる）があり、ウシには高地種のウシ（チベット農耕地帯の在来ウシ、♂は Lang, あるいは Kirkong Lang, ♀は Phamu, あるいは Kirkong Phamu と呼ばれる）と低地種のウシ（インド系の山地瘤ウシ、♂は Ronglang, ♀は Balang と呼ばれる）があると認識されている。またその分布は、ヒマラヤ北面から南面低地へと標高を下げるにつれ、ヤク－高地種のウシ－低地種のウシというようにほぼ標高によって並ぶ。

（1）ヤク－ウシ雑種

クンプで得られるウシは高地種であり、ここでつくられるのは高地種のウシとヤクの間の一世代雑種であるが、親ウシが高地種であるか否かを問わず、ゾは一般に雑種強勢によってからだが大きく、ヤクにあった長い毛はだいたい短くなる。♂の場合は輸送や犁耕にむき、♀の場合は乳量が多いが、♂ゾ（クンプでは Zopkiok と呼ばれる）は不稔である。一方、♀ゾ（同じく Zom）には妊性がある。ただし、ソル・クンプでは、ほぼすべての♂ゾは扱いよくするため3歳くらいまでに去勢されている。

クンプでつくられるウシ（高地種）－ヤクの間雑種の主な交配系統は二つあり、♀ヤクを母畜とするディム・ゾ（Dimzo）からウシへの戻し交配をす

るものと、♀ウシを母畜とするパム・ゾ (Phamzo) からヤクへの戻し交配をするものである。図1のごとく、各代の♂♀に名称が与えられている。

ただし、二代目以降の雑種はゾほど有用ではなく、育てないことも多い。とくに二代目♂は弱く、人為的に死なせることが普通である。また、戻し交配を繰り返すと四代目くらいにはいちおうウシまたはヤクに戻ったとみなされるが、これらは純粋種とくらべれば劣るらしい。♀ゾの場合、一般に乳をとることが飼養目的のため妊娠・出産させる必要はあるが、生まれた二代目はしばしば育てないのである。なお、♂の場合、四代目くらいから生殖能力が復活する(図1では、開き取りによってその有無を○×で示した)。

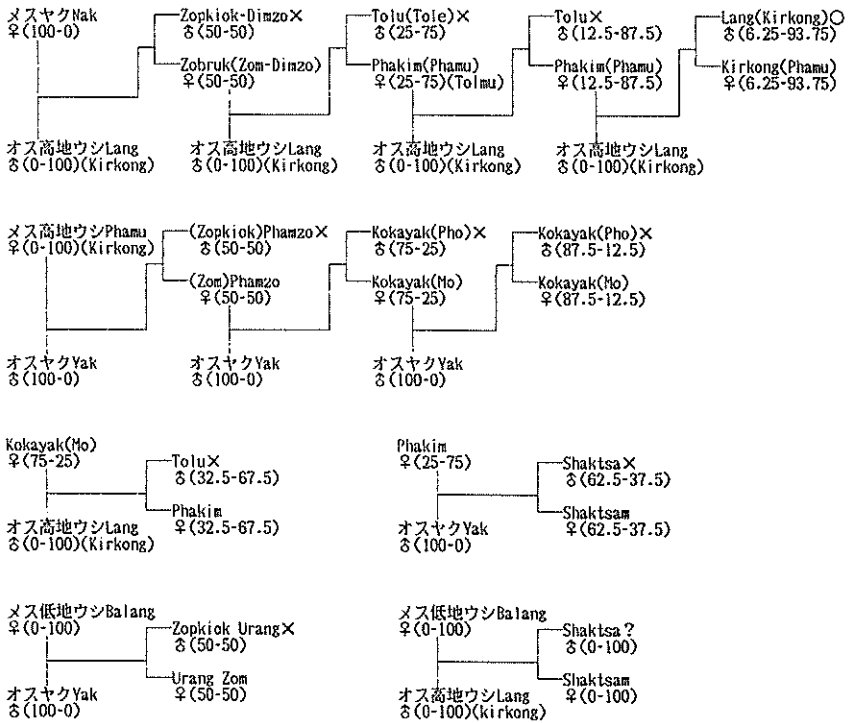


図1 ヤク—ウシ雑種の交配系統

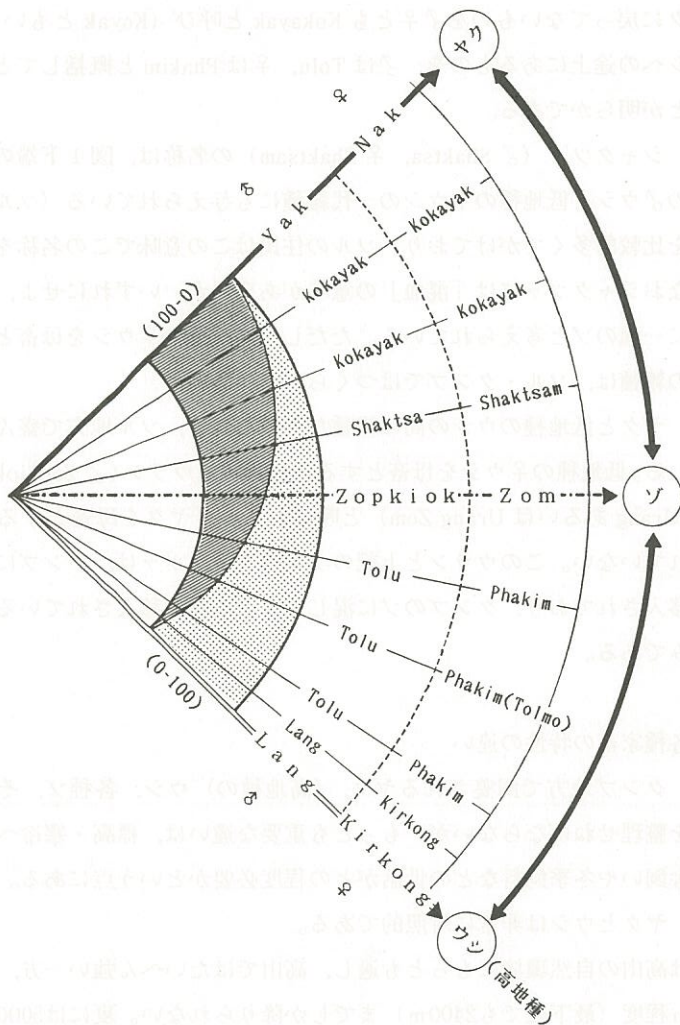


図2 ヤクと高地種のウシ間の雑種

図2では、図1に現れた各種雑種の名称を、遺伝的比率に従って並べている。他地域ではもっと細かな名称群が存在する例もあるが、クンプでは、不十分に

しかヤクに戻ってないものを♂♀とも Kokyak と呼び (Koyak ともいう)、同じくウシへの途上にあるものを、♂は Tolu, ♀は Phakim と概括してとらえていることが明らかである。

なお、シャクツァ (♂ Shaktsa, ♀ Shaktsam) の名称は、図 1 下端のように、高地種の♂ウシと低地種の♀ウシの一代雑種にも与えられている (ソルではこの生産を比較的多くてがけており、ソルの住民はこの意味でこの名称を使っている。なおシャクツァには「混血」の意味がある) が、いずれにせよ、これらはともに一種のゾと考えられている。ただし、高地種の♀ウシを母畜とするウシ同士の雑種は、ソル・クンプではつくられていない。

次に、ヤクと低地種のウシの間の雑種だが、これも、ソル地方で盛んに生産されている。低地種の♀ウシを母畜とする一代雑種はウラン (♂ Zopkiok Urang, ♀ Zom Urang あるいは Urang Zom) と呼ばれる。♀ヤクを母畜とするもののはつくられていない。このウランと上記のソルのシャクツァは、クンプにも少なからず移入されており、クンプのゾに混じっているが、移入されているのはほぼ♂のみである。

(2) 各種家畜の特性の違い

さて、クンプ地方で飼養されるヤク、(高地種の)ウシ、各種ゾ、それぞれの特性を整理せねばならないが、もっとも重要な違いは、標高・寒冷への適応性と、舎飼いや冬季飼料などの世話がどの程度必要かという点にある。これに関して、ヤクとウシは非常に対照的である。

ヤクは高山の自然環境にもっとも適し、高山ではたいへん強い一方、冬季でも 2700m 程度 (最下限でも 2400m) までしか降りられない。夏には 5000m 前後の高山放牧地で自由に野草をはませる必要がある。というのも、かりに村落に止めおいて舎飼いし、飼料をまかなって衛生環境を整えても、弱ってしまって乳・肉・毛などの質が落ちるらしいのである。そこで、夏は高山放牧地をめぐる、冬の限られた時期だけ農村近くの低所へ下り、不足分の飼料が与えられる季節的移動牧畜がなされることになる。冬季に飼料を与えてやらねばならない

期間は、3者のうちでもっとも短い。

反対に、ウシの場合は高所・寒冷への適応性については、ヤクよりも低所に適し、日中野外で放牧しても、夜には屋内に保護する必要がある。つまり、農村の近くに年中止めおいたほうがよい家畜であり、農村からの日帰り放牧に適する。冬季、飼料に依存する期間はヤクより長い。ただし、高地種のウシといっても地方によって農村の標高は異なり、適応した標高にも違いが見られないわけではない。たとえばクンプ地方の主要村落は標高3500mから3900m程度に位置するが、チベット側のティンリーでは4200から4400mあたりまで農村があり、そこにもやはりウシがいる。しかしいずれにせよ共通するのは、ほとんど年中農村にとどめての乳の獲得が♀ウシの飼養目的であること、また♂ウシの場合はほとんど役に立たないことである。クンプ以上の標高の土地のウシは、高地種といえども体が小さく、力も弱くて犁耕・輸送には適さない。このように、一言でいえば、ヤクは移動牧畜を要するのに対し、ウシは定着畜産的な保護を必要とするのである。

ゾの場合、標高・寒冷への適応性は、ヤクとウシの中間にあたる。また、移動牧畜か定着畜産かという点でも、両者の中間である。つまり、ヤク群に混ぜて放牧もできれば、ウシと一緒に夏でも農村近くに止めおくことも可能なのである。ただし、ゾの種類によって標高への適応性には微妙に違いがあり、ディム・ゾ>パム・ゾ>>シャクツァ>ウランの順に、高所から低所に適合したものとなる。冬季飼料への依存度については、ヤクよりもはるかに大きい。しかも、ゾの種類によって若干違いはあるが、毎度の食事でもヤクの倍くらいの飼料が必要と言われている。

(3) 各種家畜の用途・飼養目的

次に各種家畜の用途だが、毛・乳・肉の利用についてみると、住民の価値付けは、いずれも、ヤク—ゾ—ウシの順序になっている。ゾやウシには長毛はなく、毛の利用はヤクのみ可能である。ヤクウールは、夏に毛が生えかわる時期に手でむしりとる。背筋や脇腹の長い毛ははさみで切りとる。乳は、ヤクは

乳量は少ないとはいえ脂肪分が多く、良質のバターがとれる。ウシの乳は脂肪分がもっとも少ない。ゾの乳は、脂肪分では両者の中間だが、乳量の多い点が好まれる。肉については、去勢した♂ヤクのものがもっとも好まれるが、♀ヤクも食べられている。ゾやウシは、ほとんど食されることはない。とくに、ウシの肉はもっともまずいといわれる。ヤク肉は高価であり、住民が食べている肉のほとんどは、チベットから輸入された羊の干し肉か、低地から上がってきてナムチェ村（Namche または Nauje）のバザールで売られるスイギュウの肉である。

輸送や犁耕という荷役の点では、標高への適応性に従って、ウシ以外のヤクとゾの♂が使われる。近年、エベレスト街道の観光化に従って、飛行場のあるルクラ（Luklha, 2800m）からナムチェ（3500m）、エベレスト・ベースキャンプ（5400m）への輸送の仕事が住民にかなりの現金収入をもたらしてきたが、途中で標高の低い場所があるためもあって、♂ヤクの場合、冬季でもルクラーナムチェ間の輸送には適さない。現在、もっとも好まれているのはウランやシャクツァで、これらだとルクラーナムチェ間に問題がないかわりに、エベレスト・ベースキャンプへいくことも可能である。

ここで、家畜種ごとに用途・飼養目的をもういちどまとめると、次のごとくである。

♂ウシには、ゾ（ディム・ゾ）交配用ならびに雑種や♀ウシへかける種オスという以外に、さほどの用途はない。♂ヤクの場合、肉・毛の利用もあるが、高所での輸送、とくに、かつて盛んであったヒマラヤごえのチベット交易や、登山ベースキャンプへの輸送などに向く。♂ゾの場合、この輸送・荷役用という性格が突出するが、登山・トレッキング輸送に限らず、村落付近での農用輸送、低所との交易輸送にもヤクより向いている。

♀の場合は、ヤク、ゾ、ウシを問わず、搾乳が主目的だといってよい。ただし、たとえば乳がもっとも多い夏季には、ヤク、ゾ、ウシの順に、村落からの距離が離れるため、優れた乳ほど、それを得るには住民の側も移動せねばならない。この点、♀ヤクと♀ウシは対照的な移動性と定着性を示し、♀ウシは村

落近くでの搾乳用である。♀ゾの場合は、ヤクやウシよりも乳量が多く、しかも、ヤクよりも村落に近いところでそれが得られる点で、♀ヤクの代替畜の性格を持っている。

3 現在の家畜種構成と飼養様式

さて、多様な特性や用途をもつこれらの家畜種を、農・牧・交を兼業してきた住民たちは、実際いかに構成し世話しているのか。まず現状について、個々の世帯の保有する家畜種構成をみながら確認したい。

例として、さまざまな意味でクンプ地方の代表的な村落の一つとよいかくムジュン村 (Khumjung, 3800m) をあげたい。この村は、古くから交易依存度が高く、現在は観光基地化しているナムチェなどとは違って、伝統的な農・牧兼業も盛んであったし、かといって、いまでももっとも観光業の影響が小さく、住民の経済や文化においてもっとも保守的なポルツェ村 (Phortse) ほどに、主要道からはずれているわけでもない。つまり、伝統的な農・牧兼業から、交易そして観光サービス業へと緩やかに変化しつつあるこの地方全体の経済や文化の歴史的变化を、もっとも同時代的によく反映している村なのである。

表1は、1991年夏のクムジュンの家畜種構成である。ここでの家畜は、基本的に3歳以下の幼畜もわかる限り含めている。このデータは村の若者に聞き取ってもらったもので、全村約140戸のうち、家畜種構成を聞き取れた世帯数は102戸である。ただし、もれている世帯はカトマンズなどに長期的に出ている不在者など、家畜を持たないものが大半なので村の家畜の9割以上は確実に把握されており、全体像を把握するにはまったく問題はない。表には、102戸中家畜を保有する68世帯がヤク、ゾ、ウシの♂♀を何頭ずつ持っているかを示したが、ゾから不十分にしか「戻って」いない二代目以降の雑種はウシに含めている (たとえばKokayakの場合は、♂♀とも17頭あった)。なお、この村の♀ゾの大半はディム・ゾであり、♂ゾもかつてはディム・ゾがほとんどであったが、近年ではウランが多くなり、♂ゾ全体の半数以上を占めつつある。

表1 クムジュン村の世帯別家畜種構成 (1991年)

世帯 NO	牛 類		家 畜		の 頭 数		合 計
	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	
19	7	30	3	3	1	-	44
18	10	18	1	4	6	5	44
202	5	18	-	2	1	-	26
20	6	15	-	-	2	3	26
100	5	13	3	-	1	-	22
14	8	12	2	2	4	1	29
120	6	12	2	2	1	-	23
115	2	10	2	-	3	1	18
119	6	8	-	1	1	2	18
34	-	-	2	4	-	1	7
3	-	-	-	4	-	-	4
13	-	-	2	3	3	-	8
1	4	-	5	2	-	2	13
21	-	-	5	2	-	2	9
82	-	-	2	2	-	1	5
101	-	-	3	2	1	1	7
116	-	-	4	2	-	1	7
43	1	-	-	2	-	-	3
74	2	-	1	1	-	2	6
70	-	-	-	1	2	2	5
16	-	-	2	1	-	-	3
114	-	-	2	1	-	-	3
9	-	-	-	1	1	-	2
117	-	-	4	-	-	1	5
46	-	-	4	-	1	1	6
40	-	-	3	-	-	-	3
7	-	-	3	-	-	-	3
55	-	-	3	-	-	-	3
107	-	-	2	-	-	3	5
91	-	-	2	-	-	3	5
45	-	-	2	-	-	2	4
39	-	-	2	-	-	2	4
105	-	-	2	-	-	2	4
5	-	-	2	-	-	2	4
92	-	-	2	-	-	1	3
75	-	-	2	-	-	1	3
84	-	-	2	-	-	1	3

世帯 NO	牛 類		家 畜		の 頭 数		合 計
	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	
133	-	-	2	-	-	1	3
36	-	-	2	-	-	1	3
10	-	-	2	-	-	1	3
81	-	-	2	-	-	1	3
125	-	-	2	-	-	1	3
67	-	-	2	-	-	-	2
106	-	-	2	-	-	-	2
108	2	-	2	-	-	-	4
56	-	-	2	-	-	-	2
80	-	-	2	-	-	-	2
109	-	-	2	-	-	-	2
79	-	-	2	-	-	-	2
111	-	-	2	-	-	-	2
22	-	-	2	-	-	-	2
124	-	-	1	-	-	1	2
65	-	-	1	-	-	1	2
63	-	-	-	-	-	4	4
66	-	-	-	-	-	4	4
53	-	-	-	-	-	3	3
76	-	-	-	-	-	3	3
69	-	-	-	-	-	3	3
23	-	-	-	-	-	3	3
64	-	-	-	-	-	3	3
28	-	-	-	-	-	3	3
17	-	-	-	-	-	2	2
32	-	-	-	-	-	2	2
78	-	-	-	-	-	2	2
6	-	-	-	-	-	1	1
29	-	-	-	-	1	1	2
95	1	-	-	-	-	-	1
72	-	-	-	-	2	-	2

(家畜を持たぬ34世帯は省略)

合計数	65	136	106	42	31	84	464
世帯平均	0.6	1.3	1.0	0.4	0.3	0.8	4.5
保有世帯数	14	9	46	20	16	44	68
非保有世帯数	88	93	56	82	86	58	34
保有平均頭数	4.6	15.1	2.3	2.1	1.9	1.9	6.8

(1) ♀ヤク保有世帯

表でまず気づくように、ヤク保有世帯は少ない。ただし、♀ヤク保有世帯の場合、平均約15頭という保有規模が示すように、♀ヤクをほんの数頭のみ持つような例はない。つまりおよそ10頭以上持つかまったく持たないかである。これは、♀ヤク保有世帯の場合、移動の大きな移牧形式をとって人が家畜に常時つきそって乳をとったり子ヤクの世話をしなければならないので、ある程度の頭数規模がないと割にあわないことからきている。

図3は、♀ヤクを多数持っているある世帯の年間移動サイクルである。この世帯は、主村以外のさまざまな標高の土地に採草地や畑をもっており、クンプに伝統的なヤク移牧と農耕兼業をいまでも行っている例と考えてよい。♀ヤク保有世帯ではこのような季節移動が必要となるが、表1のごとく、♀ヤク保有世帯でも現在ではゾウシをももっていることが多い。一部を種ひとして使う

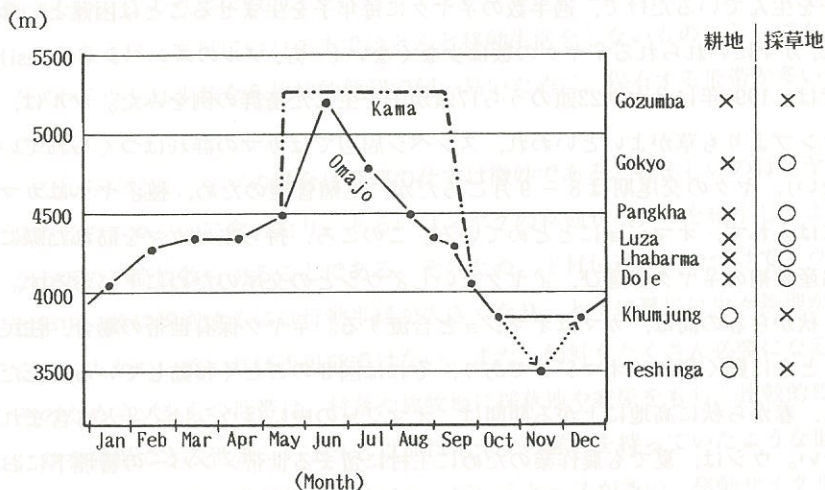


図3 ♀ヤク保有世帯の移動サイクル

注) 地名右欄の○×は、耕地・採草地の有(○)無(×)を示す。
 秋季の点線部は随時に行う一時的な移動を示す。

(3) 用途と飼養様式のまとめ

さて、以上のように♀ヤクをもつ世帯は標高差の大きな季節移動を行っており、伝統的な嗜好にもかなったヤクの乳・肉・毛などの利用を一応達成している。家畜種の中には♂♀ヤク以外にゾを交配するための親畜（♂ウシ）まで確保しており、ヤク、ゾの幼畜をえるための自給性まで確保している。

それに対し♀ヤクを持たない世帯の大部分は、少数の♀ヤクか♂ゾ、あるいはその双方を持つものからなっており、またこれらの飼養は農村に年中定着するものにとってもとくに難しくない。いいかえれば、彼らの家畜利用は、農村での貧弱な乳の獲得や比較的低所での輸送というふたつの目的のうち片方または双方をねらったものになっている。そして、雑種や純粋種の獲得においても、他の世帯の家畜に依存せねばならない点で、♀ヤク保有世帯とは対照的にその意味での自給性は低い。

♀ゾを保有する世帯は、いわば♀ヤク保有世帯から♂ゾ・♀ウシ保有世帯への漸移型をなし、季節移動の程度も中間的である。♀ゾ保有は♀ヤクに似た良質の乳を効率的にえるためであり、その点ではいくぶん♀ヤク保有世帯に近いとはいえ、雑種や純粋種の獲得の点では、♀ヤク保有世帯にある自給性はすでに失っている。

4 家畜種構成の変化

ここまでで述べてきた家畜種の特性或飼養様式、飼養目的の実情をおさえたうえで、ここ数十年の家畜種構成の統計的データをみてみると、生業戦略変化に応じた微妙な家畜種構成の変化が現れており、両者の間に深い関係性をみる事ができるのだが、その前に現代におけるクンプ地方の経済の変遷に関わる歴史について概観しておこう。

(1) 現代の経済変化と戸数・人口

今世紀前半までの情報は少ないが、1959年のチベット動乱を契機として

チベットとの国境交易が閉鎖されるまでは、クンプ地方全般としては、伝統的な農・牧・交の兼業を行っていたと一般にいわれている。このころまでのクンプの有力者は、農耕・牧畜を兼業するのに併せ、チベットとネパール中部との間の中継交易を行っていた。しかしチベット交易の途絶えた1960年代にはナムチェの定期市の設立と拡大があり、地方経済全体が着実に低地とのつながりを増した。またヒラリー卿の財団による学校や病院の設立も1960年代である。

1970年代に入ってから、観光業が着実に進展し、70年代の終わりからはとくに加速化する。クンプ側からのエベレスト初登頂は1953年だが、地元クンプ住民の登山シェルパは、ようやく1970年頃になって現れる。60年代終わりにルクラ飛行場が開けたこともあって登山客のアプローチも楽になり、また、毎年プレ・モンスーンとポスト・モンスーンにいくつもの大登山隊が訪れるようになると同時に、地元シェルパのクライマーが山で失われることも1970年頃に始まる。影響を増すツーリズムと対抗するように1976年にはクンプ地方全体が国立公園に指定されるが、1976から1979年には年間4000人程度であった外国人旅行者は、1980年には5000人、1990年には10000人を超えた。クムジュン村でも現在観光関連の仕事に関わらない一家の主人はいないといつてよいほどになっているが、危険な登山をする者は減ってきており、トレッキングのガイドやヘルパー、ヤク・ゾを使った輸送の仕事などが比較的好まれている。農牧生産での労働は、かなりの部分女性によって担われている。

このように、過去数十年間のクンプ地方の経済変化は、全体としては、農牧生産を主として中継交易や出稼ぎを併せた生業複合から、観光業を主として農牧生産をあわせる生業複合へと変化してきたといえる。

ところでクンプ地方の人口については、正確なデータは少なく、その変遷を追うことは難しい。たとえば、記録された例でも、地方全体で1971年=3119人 [BJONNESS 1979:3], 1979年=2710人 [STEVENS 1989:47], 1970年=2761人, 1982年=3108人 [PAWSON *et al.* 1984] などの数字があって、比較

的近年についても混乱している。しかし、ジャガイモが主作物としての地位を十分確立した今世紀前半には、すでにおおよそ許容量の限界に達していたと見られ、近年も、人口増加に匹敵するほどの数がカトマンズなどに流出し、全体としては停滞的状況にあるか、ごくわずかに増加している程度といわれる。ただしナムチェやクムジュン、クンデでの観察では、戸数自体はハイメンドルフの記録した1957年や1971年の時点より2割から4割ほど増えている。しかし一方少なからぬ働き手が登山事故で失われた経緯もあり、また現在各世帯の子供の数は減りつつある。これらを総合して考えると、ここ数十年の間に人口は若干増えたかもしれぬが分家が増え、世帯メンバー数は減ったと考えられる。

(2) 現代の家畜種構成の変化

さて本題に戻り、こうした現代の変容過程において家畜種構成がどうであったかをみてみよう。表1のような世帯ごとの家畜種構成に基づいて各村の家畜頭数を記録した報告はほかには未見だが、1957年以降3人の研究者によって記録された村単位の家畜種構成の情報はいくつかある。それは表2のとおりである。

表2をみれば、村ごとの家畜種構成は微妙に異なるが、これは、村の規模、利用しうる環境条件、村人の生業戦略の違いなどによっている。ただし古くからゾに特化していたナムチェをのぞき、他の村々の時代変化の傾向には似通ったものがある。ナムチェはクンプの中でもっとも生産条件に恵まれない新しい村として170年ほど前に生まれ、一貫して農牧生産よりも交易への傾斜の大きかった村であり、他の村々とは異なる特徴を持つ。

地方全体の変化傾向をみるのに、再び代表的村落であるクムジュン村に注目したい。表3は、表2、および表1の1991年調査の結果、さらに1971年の数値をあわせ、この村の家畜種構成の記録をすべて抜きだしたものである。またさらに、それを図化したのが図4である。こうして資料を可視化してみると、現代の生業戦略の変化の全体的傾向と、家畜種構成変化の対応が如実に現れてくる。

表2 クンプ地方諸村の家畜の変化

(1) 1957年家畜頭数 [VON FÜRER - HAIMENDORF 1975:44]

集落	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	合計
Khumjung	14	333	24	15	13	56	455
Khunde	2	316	35	2	17	16	388
Pangboche	2	228	7	2	3	12	254
Phortse	16	454	—	—	8	17	495
Nauje	—	40	238	50	1	48	377
Thame	2	647	79	27	27	72	854
Tengboche	—	23	4	2	1	—	30
Milingbo	2	20	—	3	—	8	33
Jaro	1	25	—	—	—	4	30
合計	39	2086	387	101	70	233	2916

(2) 1978年家畜頭数 [BJONNESS 1979:14]

集落	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	合計
Khumjung	62	121	60	98	8	80	429
Khunde	40	109	61	56	5	37	308
Pangboche	75	175	25	24	7	39	345
Phortse	95	260	7	12	3	31	408
Nauje	51	31	80	49	8	82	301
Thame	134	496	134	103	31	126	1024
Yak Farm	12	54	4	2	—	—	72
合計	469	1246	371	344	62	395	2887

(3) 1984年家畜頭数 [BROWER 1991:110]

集落	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	合計
Khumjung	62	88	82	60	7	74	373
Khunde	62	85	56	80	5	42	330
Pangboche	69	132	21	32	7	57	318
Phortse	67	261	7	27	5	16	383
Nauje	44	30	138	18	3	53	286
Thame	109	525	178	41	35	103	991
合計	413	1121	482	258	62	345	2681

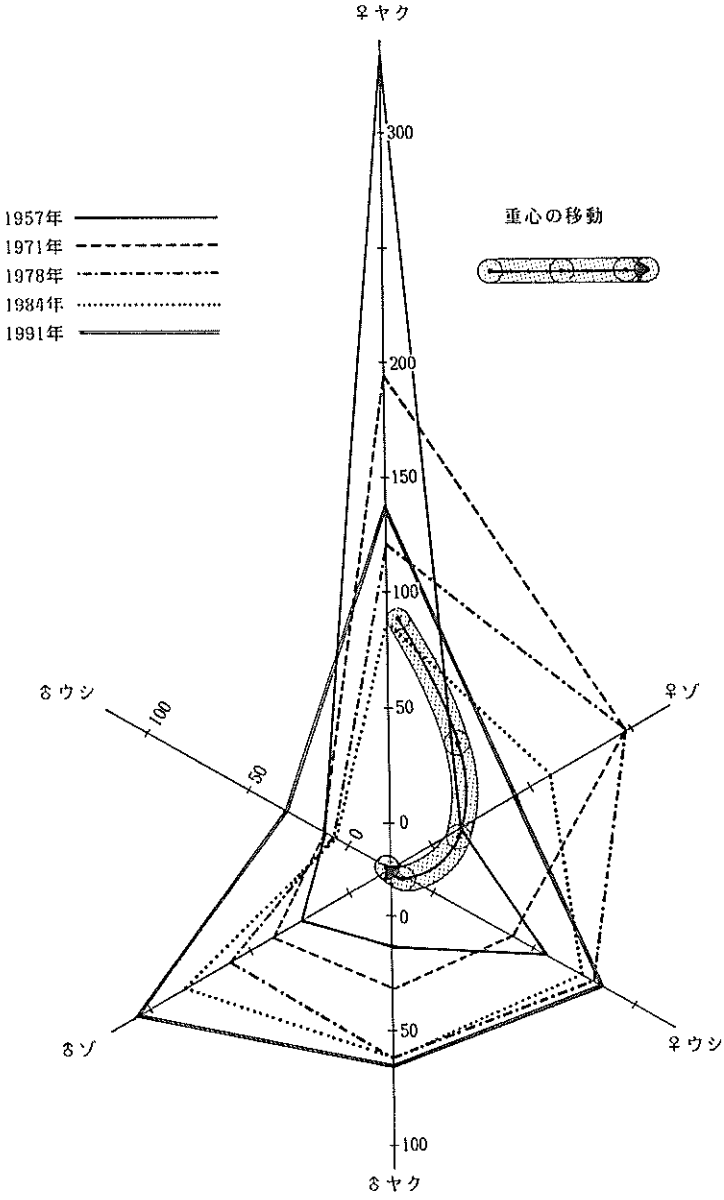


図4 クムジュン村の家畜頭数変化

表3 クムジュン村の家畜頭数変化

年	♂ヤク	♀ヤク	♂ゾ	♀ゾ	♂ウシ	♀ウシ	合計	出所
1957年	14	333	24	15	13	56	455	VON FÜRER - HAIMENDORF 1975:44
1971年	32	194	39	98	13	40	416	VON FÜRER - HAIMENDORF 1975:57
1978年	62	121	60	98	8	80	429	BJONNESS 1979:14
1984年	62	88	82	60	7	74	373	BROWER 1991:110
1991年	65	136	106	42	31	84	464	1991年調査 (102戸分)

クムジュン村全体の家畜種構成がいちおう把握されたのは、(1)1957年、(2)1971年、(3)1978年、(4)1984年、(5)1991年という5つの時点であるが、これらを、農牧生産を主として中継交易や出稼ぎを併せた生業複合から、観光業を主として農牧生産をあわせる生業複合へと変化してきたクムジュン全体の経済変化の過程から位置づけると、ちょうど(1)が伝統的な生業複合の時期であり、(2)は観光業の影響が出始めるころであり、(2)→(3)→(4)→(5)は、加速化する観光業への依存が深まっていく過程である。

家畜種構成変化の全体像を端的に示しているのは、各時点の家畜種構成を図4で表現している六角形の重心の移動である。(1)から(5)への変化は、♀ヤクに中心のあったものが、いったん♀ゾの軸の低い方に寄ったが、一貫して緩やかに増加してきた♂ゾや、一定の増加を見せた♂ヤクや♀ウシに引っ張られ、今ではどの家畜にも特別特化しているわけでもなくなってきたのである。全体としていえば、主生業が農牧生産から観光業へと移ってくるに従って、クムジュン地方住民は、乳の獲得の後退(♀ヤク→♀ゾ→♀ウシ)と輸送力への傾倒(♂ゾ、♂ヤクの増加)を同時的に行進させることによって、現代を生き延びてきたわけである。こうした両者の対応関係は、もう少し細かくみることでさらに確認できる。

(1)の1957年の時点では、明らかに♀ヤクが中心であり、ゾは♂♀ともに少なかった。チベット動乱以前の時代には、今より多くの世帯が♀ヤクをもち、♀ヤクに従って大きな高度差を移動する牧畜を行っていたことはいままで何度も指摘されてきた事実である。ところが、観光化の影響が出始めた(2)の時点や、

それがより顕著になってきていた(3)の時点では♀ヤクは一貫した減少を示し、ここでいったん♀ゾが急激に増加していた。これは、♀ヤクの喪失による乳の欠落を一時期♀ゾが担ったものと思われる。またこのとき、♂ヤクも増加し、♂ゾも徐々に増加しているが、これは観光用の輸送目的の拡大という全体的趨勢に応じている。

観光化が村社会の隅々まで十分な浸透を達成しつつある(4)そして(5)の時点で♀ゾがどんどん減少することは、もはや♀ゾで乳をえることもかなり放棄されてしまうという乳利用の後退傾向の一部である。ところでここで♂ヤクの増加が頭打ちになったのに対し♂ゾが徐々に増加するのは、観光用の輸送目的といっても、それが比較的高所での輸送から低地をも含んだ輸送をもくろむものへと変わってきたという近年の変化に対応していると考えられる。

家畜種構成や生業戦略の選択・変化の背景には、地方全体で飼養しうる家畜頭数の限界のごとき生態学的条件や、戸数（そしておそらく若干の人口）の増加、登山事故などによる有力な働き手の減少といった社会条件など、さまざまな次元の条件が絡んでいるに違い。しかし、以上述べてきたように、家畜種構成はここ数十年のうちの外的経済条件の変化に対して選択された生業戦略を細かいところから非常によく反映していることが明らかである。そして、家畜種ごとの特性を基礎において細かな家畜種構成の変化に注意を払うことで、逆に生業戦略の全体的構造も、よりクリアに理解できてくるように思われるのである。

すくなくとも現代のクンプ経済においては、一部の家畜種の持つ特性、とりわけ♂ゾの輸送力が、外的な経済条件と住民の生業戦略の対抗関係の狭間で、もっとも重要な、しかも両者の全体性が接触するの一つ焦点として機能してきたのだといえるであろう。

5 おわりに

本稿では、従来のクンプ地方の牧畜・生業の研究ではさほど細かく検討され

てこなかった世帯や村落の家畜種構成をとりあげ、それが住民の選ぶ生業戦略の性格と密接に関係することを記述的に報告した。

報告を終えて強く感じることは、ヤクとウシを確保しつつ、その間にある遺伝的近縁性を応用して多様なゾを活用する知識があれば、社会全体として、外部から及ぶ経済・社会条件の変化や、新たに未利用地に入植したりする場合の土地の生態学的条件の変化や多様性にたいしても、一定の振幅における安定性を確保できるという点である。つまり、親畜双方に似て非なる個性的な雑種をもって、さまざまな特性においてある不連続な連続が利用できることで、純粋種にはない融通性をかちえている点である。この安定性は、地方によってかなり多様な生態学的条件をもち、また農・牧・交の間にある重心を、時代により場所によって自在に変化させてきたチベットの世界的世界の、多様性と統一を理解する上で非常に重要にも思われるのである。

引用文献

BJONNESS, INGER - MARIE

- 1979 *Impacts on a High-Mountain Ecosystem: Recommendations for Action in Sagar-matha (Mt. Everest) National Park*. Department of National Parks and Wildlife Conservation, Kathmandu.

BROWER, BARBARA

- 1991 *Sherpa of Khumbu: People, Livestock, and Landscape*. Oxford University Press, Delhi.

DOWNES, J.F.

- 1964 Livestock, Production, and Social Movility in High Altitude Tibet. *American Anthropologist*, 66:1115-1119.

DOWNES, J.F. and R.B. EKVAL

- 1965 Animals and Social Types in the Exploitation of the Tibetan Plateau. ANTHONY LEEDS and ANDREW P. VAYDA (ed.), *Man, Culture and Animals*, American Association for the Advancement of Science, Washington, 169-184.

VON FÜRER - HAIMENDORF, CHRISTOPH

1975 *Himalayan Traders*. John Murray Ltd., London.

JHOSHI, DURGA DATT

1982 *Yak and Chauri Husbandry in Nepal*. Kathmandu.

鹿野勝彦

1978 「ヒマラヤ高地の移牧 — 高地シェルパの例を通して —」『民族学研究』43(1): 85-97.

小林茂

1987 「ネパール・ヒマラヤのヤク — ウシ雑種生産」福井勝義・谷泰（編）『牧畜文化の原像』日本放送出版協会, 207-244.

NISHIDA, TAKAO *et al.*

1988 *Morphological and Genetical Studies on the Native Domestic Animals and their Wild Form in Nepal, Part 1*. Faculty of Agriculture, The University of Tokyo.

1989 *ibid.*, Part 2.

PAWSON, IVAN G. *et al.*

1984 Effects of Modernization on the Khumbu Region of Nepal: Change in Population Structure, 1970-1984. *Mountain Research and Development*, 4(1): 73-81.

PHILLIPS, R.W., I.A. TOLSTOY and R.G. JHONSTON

1946 Yak and Yak-Cattle Hybrids in Asia. *Journal of Heredity*, 37: 162-170, 206-215.

STEVENS, STAN

1989 *Sherpa Settlement and Subsistence: Cultural Ecology and History in Highland Nepal*. Unpublished Ph.D. Dissertation, University of California at Berkeley.

月原敏博・古川彰

1991 「クンプ、ティンリー両地方の生業空間編成」『ヒマラヤ学誌』2: 169-209, 京都大学ヒマラヤ研究会.